

三島由紀夫『夏子の冒険』の北海道

― 掲載誌『週刊朝日』から考える

一 はじめに

三島由紀夫『夏子の冒険』（『週刊朝日』一九五一年八月五日―十一月二十五日）は、「あたくし修道院へ入る」という夏子の唐突な宣言で始まる。二十歳になる令嬢の松浦夏子は、何不自由のない東京での生活や周囲の男たちの凡庸さに飽き果て、突然に函館の修道院に入ること宣言し、穏やかな家族団欒の朝食の場を騒然とさせる。頑固なところのある娘の宣言を、家人は洪々受け入れるしかない。修道院まで見送りのために付き添う母、祖母、叔母とともに函館へ向かう船上で、夏子は猟銃を持った青年井田毅と出会う。毅は、自分の恋人を惨殺した熊をしとめるために北海道に赴くことを夏子に打ち明ける。復讐の情熱を抱いた毅に惹かれた夏子は、修道院行きを止めて母親ら同行者から行方をくらまし、北海道の自然のなかを熊を求めて毅とともに冒険旅行を展開する。母親たち三人は、慣れない北海道で夏子を探して右往左往の珍道中を繰り返す。行動を共にするうちに二人は互いに惹かれ合うが、熊をしとめる目的を達するまでは純潔を守り通す。ついに毅は熊を倒したが、その目的を果たした途端に情熱を失った毅の姿がこれまでの男たちと同様に凡庸なものに夏子は感じられ、毅と

の未来に待ち構えている生活と決別し、再び函館の修道院に入ること宣言する。

中 元 さおり

周囲を振り回すような夏子の行動力の源泉は情熱である。「夏子の眠つてゐる情熱は、よほど烈しい強力なものだつたので、それと同じ烈しさ同じ強さをもった情熱としか共鳴しない性質をもつてゐた」という夏子の情熱からもたされる「詩人の靈感」こそが、彼女の行動原理である。夏子は自分の情熱と共鳴するものが東京の生活にはないことを悟り、逆説的に修道院での生活にこそ情熱の発露を求める。しかし、毅との偶然の出会いによつてもたらされた命懸けの冒険は、情熱をかけるような人生の可能性を見極める試みでもあり、そのような人生は現実世界ではもはや不可能であることを悟る旅でもあった。それは、夏子の情熱が、現実世界での冒険という行動から修道院という精神世界のなかへ遁走していく過程でもある。

『夏子の冒険』は、これまで本格的に論じられることは少なかった。木村康男が「モダンで軽妙なタッチのロマンチック・コメディ」と解説しているように、週刊誌の連載小説として三島が軽く書いたものといふとみなされてきた。松本鶴雄も「大衆的な喜劇、ユーモアに溢れている」という大衆小説としての評価を引き継ぎつつ、「井田を見る夏子の眼

に三島ロマンチズムとヒロニーが横溢している」と指摘している。⁽²⁾

また、近年では村上春樹『羊をめぐる冒険』と関連づけた論考もみられる。⁽³⁾高澤秀次は、村上の作品は「三島の死後、その『冒険』の不可能性の意味を真摯に受け止め、この作品の大きなパロディ化を試みた」とし、「この作品で村上は、戦後という時代にあつての冒険の不可能を、三島の死を媒介に再度喚起しているのだ」と論じている。⁽⁴⁾

さらに、夏子突き動かしていく情熱について大澤真幸は「すでに、理想を理想として維持することの困難を表現していると解釈することができる。この約二〇年後に三島は、実際に、理想の時代の破綻を自らの自殺をもって体现することになるわけだが、そこへと向かう問題意識は、この時点で、無意識の内に孕まれていたとも言えるだろう」と指摘している。⁽⁵⁾

先にも述べたように、夏子の烈しい情熱をかたむけるに値するものは現実には見出せず、結局、修道院という精神的な世界へと向かつていく。つまり、最終的に夏子が選択する世界が、男性不在の精神世界であることは興味深い。夏子の情熱は、恋愛や結婚という形をとることと、常に男性を通して実現されるべきものとしてあつた。だからこそ、凡庸な男たちに囲まれた人生へ倦み果てたわけだが、男たちが体現するような現実世界を切り捨て、修道院という会話すら禁じられた女性だけの精神世界へと向かう。夏子の情熱は、修道院という空間で神を通してこそ実現されるものであることに賭けるのだ。俗世間にまみれた現実の男たちではなく、絶対的な神への奉仕によって見出される情熱へ。現実への深い失望から、絶対的な存在に捧げるものとして新たな世界を見出していくという夏子の変貌に、その後の三島の作品

の萌芽を認めることができるだろう。⁽⁶⁾

『夏子の冒険』における影響関係を考察した鈴木千祥は、三島によるメリメ『カルメン』や菊田一夫の映画『リラの花忘れじ』（一九四七年公開）歌謡曲『イヨマンテの夜』（一九四九年）、また『竹取物語』や谷崎潤一郎『細雪』（一九四六―一九四九年）などの受容について指摘している。鈴木は「西洋から日本の古典まで幅広く摂取しており、三島はそれらを自由に飛躍させ、この作品のエンターテインメント性を高めることに成功している。当時の映画や歌謡曲から、大衆にとつて既知の事実――（北海道）、（アイヌ）、（熊）、（修道院）などから構成されていた、エキゾチックなイメージを巧みに利用し、構成したのである」と、『夏子の冒険』の背後にあるさまざまな表象との影響関係を検証している。⁽⁷⁾

近年、少しずつ論じられ始めた『夏子の冒険』だが、本論では掲載誌の『週刊朝日』に注目して、読者の反応を手がかりに『夏子の冒険』での北海道描写の意味について考察する。

二 『夏子の冒険』連載の背景

『週刊朝日』一九五一年八月五日から十一月二十五日にかけて掲載された『夏子の冒険』は、三島にとつて初めての週刊誌での連載小説である。吉川英治の『新・平家今昔紀行』の連載終了に代わるものであつた。吉川は小説『新・平家物語』を一九五〇年四月から連載していたが、執筆のための取材旅行を紀行文として併載したのが『新・平家今昔紀行』である。スピノフとしての紀行文が同時に連載されて

いたことから、『新・平家物語』の人気の高さがうかがえる。実際に、吉川の『新・平家物語』は『週刊朝日』の看板として約七年もの長期連載小説となる。このような状況を鑑みると、吉川の紀行文と交代して連載をスタートさせた三島のプレッシャーは小さなものではなかっただろう。

『夏子の冒険』の連載スタートを告知する「お知らせ」欄（一九五一年七月二十九日号）では、「いよ／＼、現文壇のホープ、三島由紀夫氏の現代小説『夏子の冒険』を連載いたします」という編集部の言葉が掲載されている。三島作品には「現文壇のホープ」、つまり若手の作家による「現代小説」として、吉川作品との明確な棲み分けがはかれるようなものが期待されていたようである。また、『夏子の冒険』の挿絵を当時絵画界の重鎮であった猪熊弦一郎が担当したことからも、三島作品に寄せる編集部への期待の大きさが分かる。三島は『仮面の告白』（一九四九年七月）などで新人作家として文壇の注目を集めていたが、『週刊朝日』というメジャー週刊誌での連載は、三島にとっても新たな挑戦であり、知名度と活躍の幅を広げる大きなチャンスだったといえる。ちなみに、『夏子の冒険』が連載されていた一九五一年時点では、週刊誌は朝日新聞社の『週刊朝日』と毎日新聞社の『サンデー毎日』の二誌しか発行されていなかった。その後、一九五六年に新潮社の『週刊新潮』、一九五八年以降には続々と女性週刊誌が発表され、〈週刊誌ブーム〉が到来する。

三島は連載開始を告知する「お知らせ」欄で、次のような「作者の言葉」を語っている。

今度の小説は、今まで私の畑であつた都会趣味の心理小説から離れた、かなり荒っぽい題材のものである。むかしからメリメの小説を愛読していたから、そういう題材には興味があつたのだが、不勉強で、背景になる地方の調査などが面倒なために手が届かなくていい。はじめて機会を得たので、私はこういう題材にとりくむ意気込を改めて持った。舞台は北海道だが、主人公の若い男女は都会人である。しかし都会の中には若い彼らがあふれるエネルギーをぶつけるに足る対象がみつからない。彼らは別々の夢をもつて東京を出てくる。この若若しい青春のはけ口を託するに足る夢を、今の時代が与えてくれないことが不満なのである。

私は現在の日本に多少とも外地にちかい雰囲気を感じている北海道の湖や森のなかに、彼らの夢を追つてゆこうと思う。彼らのロマンチズムにかぶれた脱線旅行を、苦笑したり皮肉つたりしないで追つてゆこうと思う。野宿の恋人同士が夜半目をさまして仰ぐ星は、どの星座の星がよからうか？ 大熊座の星がよいだろうか？ かれらの情熱は熊の形をしているからである。

三島にとってこの連載は、「都会趣味の心理小説」から脱した若者の行動を中心に描くものであること、「現在の日本に多少とも外地にちかい雰囲気を感じている北海道の湖や森」を作品の舞台とするなど新たな挑戦となる作品であり、「文壇のホープ」として現代的な小説を書くという若手作家としての三島の意気込みが伝わってくる。

三 『週刊朝日』の読者層について

戦後の『週刊朝日』の舞台裏を知る高橋呉郎によると、同誌の黄金期は一九五七年といわれ、翌一九五八年の新年号は百五十万部の発行を誇っており、「日本の週刊誌界で、この数字は、いまだに破られていない」⁽⁸⁾ようである。『夏子の冒険』は『週刊朝日』が黄金期に向かつて勢いを増し始めた時期に連載された。

一九四七年七月から編集に携わった扇谷正造が想定した『週刊朝日』の読者層と編集方針は次のようなものであった。

扇谷は読者層の大きな部分に家庭の主婦を意識した。その編集方針は「週刊朝日」が家庭で読まれる雑誌であることを前提にしている。扇谷自身は「ホーム・ジャーナル」という言葉をつかっていないけれど、ホーム・ジャーナルの王国を築いた。

扇谷は当初、インパクトの強いノンフィクションで売れる雑誌をつくりたいと思っていた。スキヤンダルもニュースの内と想っていた。それが、徐々にホーム・ジャーナルに移っていく。その最大の要因は『新・平家物語』にあった。『新・平家』の読者は中学生から、かつて『宮本武蔵』を愛読したお年寄りにまで及んでいる。宅配が全部数の四割もあることを考えれば、これらの読者を大事にしなければならない。扇谷は女性読者を意識するようになった。⁽⁹⁾

吉川英治『新・平家物語』（一九五〇年四月～一九五七年二月、全

三五五回）と連載の時期が重なる『夏子の冒険』も、もちろん想定する読者層は同じであり、幅広い年齢層かつ、女性の読者が多いことを意識したものであったと考えてよいだろう。

さらに、『週刊朝日』の読者像について扇谷は「義務教育プラス人生経験十年」という具体的なイメージをもっていた。「読み書きは、義務教育しかうけないけれど、人生上の経験によるカンが、これを土台として或る程度のものを読みこなし得る」⁽¹⁰⁾というリテラシーレベルを持った読者層をターゲットにして『週刊朝日』の編集にあたっていた。『夏子の冒険』もまた、そのような読者に向けたものとして書かれることが作者に要請されたはずである。

『週刊朝日』の読者層について、もう少し具体的な把握をしておきたい。その実態を明らかにしたものに、一九六〇年十二月に朝日新聞大阪本社出版広告部がおこなった読者調査をまとめた『週刊朝日読者調査報告書』（一九六一年一月）がある。三島の『夏子の冒険』の連載から九年後に行われたものであるため、必ずしも連載時の読者層や出版状況と一致するものではないかもしれないが、戦後における同誌の読者の実態を伝えるものとして参照したい。

まず、この調査対象になっているのは、大阪市内に居住の『週刊朝日』の定期購読者五〇〇名である。このアンケートには四九二票の回答が得られ、九八・四％という高い回答率であった。また、回答者の性別は、男性四九・六％、女性五〇・四％と、男女がほぼ同数であることから、先に紹介した高橋呉郎や扇谷正造の証言を裏付けけるものといえるだろう。

年齢層をみると、男女ともに一番多いのは「三十代」（男性二

八・七%、女性三一・九%）で、二番目に多いのは「二十代」（男性二一・三%、女性二二・二%）となっている。

また、性別ごとの職業では、男性は「勤人」が二五・四%、女性は「主婦」が六九・四%である。そして、読者の学歴については、「新高・旧中卒」が全体の五五・一%を占めている。編集長の扇谷が想定した義務教育までの学歴に該当する「新中・小学卒」者は一七・三%と多くはないが、「ホーム・ジャーナル」としての読みやすさが求められる週刊誌においては、この「新中・小学卒」者のレベルを想定した文章が求められたことがこれらの調査からもわかる。⁽¹⁾一九四七年から編集長を務めた扇谷が想定した「義務教育プラス人生経験十年」という読者のリテラシーレベルは、一九六〇年の時点でも引き継がれていたと考えられよう。

四 読者の反応―『夏子の冒険』論争について

『夏子の冒険』連載当時の読者の反応はどのようなものだったのだろうか。本項では、『週刊朝日』の読者投稿を手がかりに考察する。

『週刊朝日』の読者投稿ページ（読者と編集者）を調べてみると、『夏子の冒険』の連載中に作品の評価をめぐって論争が起きていたことが分かった。この作品に対する読者の投稿がはじめてみられたのは、一九五一年十月十四日号である。この号には『夏子の冒険』第十一回（第十九章）が掲載され、作品の中盤にさしかかった頃である。毅と夏子は熊が出没したという情報を追って、支笏湖周辺のアイヌ部落へ赴き、彼らが追っている四本指の熊に襲われた青年の緊迫した体験談

が語られる章が掲載されている。

この号の〈読者と編集者〉コーナーでは、「『夏子の冒険』をめぐって」というタイトルが付され、好評、不評の両方の立場からの読者の声が紹介されている。まず、『夏子の冒険』を歓迎する声として、長野県在住の男性と思われる読者（年齢不明）の投書が紹介されている。この読者によると、小学五年生の男の子も中学一年生の女の子も楽しく読んでおり、「このように人間を養う小説は、近ごろ全く旱天の慈雨」であり、このような小説が「もうそろそろ出廻つてもよい頃だと思つていた所です」と『夏子の冒険』への強い感激を伝えるものである。この読者は、子どもと一緒に気持ち良く読むことができる小説の登場を待ち望んでいたようであり、『夏子の冒険』は戦後小説のなかでも、あまり深刻すぎない明るい作品として好評であったことが分かる。北海道を舞台にした冒険物語としてのエンターテインメント性は、少年少女読者にも楽しめるような読みやすさを備えていたようである。この点においては、三島が「作者の言葉」で述べていた「都会趣味の心理小説から離れた」ことが功を奏したと言えるだろう。

一方、奈良県在住の男性（年齢不明）からは、「全く上流階級の、時間と金銭の遊戯にすぎない。血となり肉となるヒューマニズムのかけらもありません」という厳しい批判が寄せられている。生活の苦勞を知らない令嬢の夏子と社長子息の毅が繰り広げる冒険譚は、戦後間もない時期の大半の読者の生活感覚から乖離した絵空事の「遊戯」のように感じられ、切実なテーマ性が欠如しているという指摘である。確かにこの号までの小説の展開では、毅と夏子が熊を求めて函館から札幌、白老へと移動していく道中が描かれており、まだ熊狩りの緊迫

感は少ない。『夏子の冒険』が、吉川英治の『新・平家今昔紀行』と入れ替わりでの連載という落差の大きさも読者の違和感につながっているのかもしれない。吉川の『新・平家今昔紀行』は、平家興亡の跡を訪ねながら過去から現在へと思索をめぐらせたエッセイだが、『新・平家今昔物語』のような紀行文になじんだ読者からすると、『夏子の冒険』の北海道をめぐる旅に冷ややかな印象を抱くのも無理はない。

この両者の声からは、週刊誌の連載小説に何を求めるかという点において、受け取り方の違いが生じていることが窺えるが、いずれにせよ、両者はともに小説に対して「人間を養う」役割や、「ヒューマニズム」といったものを期待している。『週刊朝日』読者にとって、連載小説は少なからず人間性を修養するようなものであるということが共通認識となっていたといえるだろう。しかし、『夏子の冒険』は、全体を読み通してみても、そのような教養主義的なテーマ性をもった作品とは言いにくい。主人公が苦難を乗り越え、成長するような物語を読者が期待していたとすれば、『週刊朝日』の読者が連載小説に期待したものと『夏子の冒険』には落差があったように思われる。また、このような読者の声は、作者である三島の目にも入っていたことだろう。初めて週刊誌に連載を持ちまだ新人の域を出ていない立場の三島にとって、突如沸き起こった『夏子の冒険』論争は、週刊誌という媒体に小説を連載することの厳しさを感じさせるものだったかもしれない。¹²⁾

この論争は、次号の十月二十一日号（『夏子の冒険』第十二回掲載、第二十・二十一章）で「続・“夏子”論争」として引き継がれている。前号の批判的立場の投書に賛同する男子学生（北海道在住、年齢不明）

の投書には「この作品の一体どこに、われ／＼と同じ社会に生活している人間の呼吸が感じられるというのでしょうか。」と、やはり読者の生活感覚から大きく離れたものだという指摘がみられる。また、この読者は北海道在住者として「北海道の風景描写も北海道に住む者の実感とは、はるかに遠いものがあります」と、北海道の風景描写にも実感の伴わない作り物めいた感じを受けている。この投書の前号までは、『夏子の冒険』の第十九章が掲載され、物語は熊が出現したとされる支笏湖畔や千歳川流域が舞台となっている。毅と夏子が熊に襲われて入院している青年から話を聞く場面である。函館の都会から、アイヌ部落が点在する北海道の森へと作品の舞台が移動している。三島にとって北海道を舞台にすることは挑戦的なことであったが、読者の立場からすると北海道という場をいかしきれていない、実感の伴わないものであったようだ。三島の北海道描写には、どこかぎこちなさや不慣れな印象が強く、北海道在住の読者としては物足りない点を指摘せずにはいられなかったようである。

また、前号の投書で話題となっていた「血となり肉となるヒューマニズムのかけらもありません」という指摘について反対の意を表明した十九歳男性（京都府在住）からの投書も紹介されている。「いつの世にも存在する、青年の人生に対する苦悩と夢を一つの方向からながめて取扱った面白い恋愛小説」で、「険悪なる社会にくたびれた我々の神経には「夏子の冒険」はむしろ好適な読物」であると評価し、夏子や毅と同年代の若い読者にとっては、その青年期特有の「苦悩と夢」へ共感するところもあり、また、日々の神経の疲れを癒やす「読物」として受け止められている。ここには、週刊誌の連載小説に読者が期

待したのは、楽しく読み進めることができるエンターテインメント性をもった作品であることがうかがえる。ただし、この男性も前号で指摘された「全く上流階級の、時間と金銭の遊戯にすぎない」ということについては、「いささか現在という嵐の時代に遊離した点を認めぬでもありません」と同意を示しており、同時代、同世代の読者からするとやはり現実離れたキャラクターへの違和感は強い。

さらに、この論争は『夏子の冒険』連載終了を目前に控えた十一月十八日号（『夏子の冒険』第十六回掲載、第二十八、二十九章）でも続いている。宮城県在住の三十四歳女性は、「デリケートな神経の行き届いた文章をゆつくり読んでいただけで、情景が鮮やかに浮び、天然色映画はこうもあるかと思う程です」と評価し、論争で話題となっている北海道在住読者からの風景描写に対する厳しい指摘に対して「住み馴れた心にうつる姿と、作家の、そして多分旅人の作者が捉えた印象との間にはズレはあり得るのではないだろうか」と応酬している。確かに、北海道をめぐる描写は、その土地を知悉した内部からの視線ではなく、東京からの来訪者を通した外部からの視線で語られている。杉山欣也は「当時まだ日本国内における〈外地〉として認識されがちであった北海道をエキゾチックに、やや強い表現で言えばオリエンタリズムのまなざしで表象している」¹³と指摘しているが、この点については連載時から読者の間で度々話題にのぼっていたことになる。

以上、読者の反応から見えてくるのは、週刊誌の連載小説に求められる〈読物〉としての役割である。たとえば、「これまでの私の読んだ限りでは戦後の新人の作品は、殆どが恐い顔で「人生探究が忙しく

てナリフリなど構っておれん」と殊更、弊衣破帽をみせびらかすような文章ばかりで失望していたので、「夏子の冒険」第一回で忽ち嬉しくなつてしまいました」（十一月十八日号、前掲の宮城県在住三十四歳女性）に代表されるような『週刊朝日』読者の読書体験からは、深淵なテーマを掲げたいいわゆる戦後派的な小説よりも、『夏子の冒険』のように主人公の大胆な行動力でストーリーが展開されていくような小説の方が、〈読物〉としての役割を果たした好ましいものとして受け入れられたということだろう。ちなみに、この読者は、『夏子の冒険』を読むまでは「三島さんのは読む機会に恵まれなかったのです」と述べており、文壇で話題になった『仮面の告白』（河出書房、一九四九年七月）から二年経つていても、『週刊朝日』の読者にとつて三島は「現文壇のホープ」という新人作家の一人としての認知にとどまっていた。つまり、三島由紀夫という名前をかるうじて知っているような読者に向けて小説を書くことが求められていたのである。さらに、子どもにも読ませているという投書があったように、ホーム・ジャーナルを標榜する『週刊朝日』の連載小説には、親子で共有できるような作品であることも、連載小説としての条件であったと考えられる。そのためには、〈読物〉としての面白さを支えるストーリー展開が重視されたのではないだろうか。「現文壇のホープ」として『夏子の冒険』ではじめて週刊誌の連載をまかされた三島にとつて、読者の期待に応えられるような作品をいかに書くかということを意識した作品が『夏子の冒険』だった。

五 北海道の観光ブームと『夏子の冒険』

北海道を舞台に、情熱を互いの胸のうちに燃やしながら熊を追いかける夏子と毅の冒険物語は、読者が展開を楽しむことのできる作品だったが、そのような『夏子の冒険』の構想は、『週刊朝日』編集部厚望に応えたものであったと考えられる。若い男女の冒険と恋愛の物語という設定は、二十代から三十代の男女を中心にした読者層を抱えるこの雑誌のニーズに合っている。『夏子の冒険』は小説連載の約三年後、一九五三年一月に映画化（監督…中村登、主演…角梨枝子、若原雅夫、松竹）される。北海道で撮影がおこなわれ、北海道の景色が豊かに表現された「総天然色」映画であることが評判を呼んだ。前項で紹介した読者の声に「デリケートな神経の行き届いた文章をゆつくり読んでいくだけで、情景が鮮やかに浮び、天然色映画はこうもあるのかと思う程です」というものがあつたことが思い起こされるが、小説『夏子の冒険』は後に映画化されることを念頭に置いた作品だった可能性もあるだろう。小説『夏子の冒険』の北海道描写には読者の間に賛否両論がみられたが、三島が連載を前に語った「私は現在の日本に多少とも外地にちかい雰囲気を感じさせている北海道の湖や森のなかに彼らの夢を追つてゆこうと思う」というねらいは、小説から映画へと引き継がれており、北海道という場所が大衆の関心を強く惹きつけるものであつたことが分かる。

小説『夏子の冒険』では、北海道という舞台は読者の情感を呼び起こすものとなっている。『夏子の冒険』で描かれる北海道は、都会の風景としての函館や札幌の街の様子と、森と湖に囲まれた大自然の風景が対照的でもある。特に毅が追っている人を襲う熊は、自然がもた

らす野蛮で残虐な圧倒的な暴力を象徴する。その熊が東京から来た毅のライフルによつて倒されることは、近代的な力によつて自然が制圧されていくことの象徴として読める。熊狩りのために現地のアイヌ人が集められるが、陣頭指揮をとるのは札幌から来た狩猟家である。また、毅が復讐を決意した事件も熊の犠牲になったのは和人の娘秋子である。自然豊かなアイヌ部落を舞台にしながらも、外部からアイヌ部落にやつて来た者たちを主軸に物語は展開する。当時のアイヌの人々が直面していた問題を焦点化することを避け、近代化によつて北海道の自然が制御されていく様子が、毅による熊狩りによつて描かれているといえるだろう。

また、戦後、観光地としての北海道が見出されていく過程のなかに、『夏子の冒険』を位置付けることもできるだろう。『夏子の冒険』では、東京上野を出発し函館へ向かう過程が鉄道と青函連絡船の旅によつて描かれる。夏子と同行する母親たちによつて繰り上げられる珍道中は読者を楽しませる。青函連絡船の船上や函館山から眼下に広がる景色を眺める夏子と毅の出会い、読者の旅情を誘い、ロマンスの舞台としての北海道が演出されている。

北海道に空前の観光ブームが巻き起こるのは、一般的には一九六〇年あたりとされる。北海道文学に造詣が深い木原尚彦によると「おりしも北海道は道東を軸として戦後最初の観光ブームであつた。原田康子の『挽歌』がその渦中にあり、『森と湖のまつり』（引用者注 武田泰淳の作品）がそこに踵を接したことになるが、映画化の影響も見逃すことはできない。五所平之助監督『挽歌』（松竹）は三十二年に、内田吐夢監督『森と湖のまつり』（東映）は翌年に公開されて観光ブ

ームに一そう拍車をかけたことであつた」と指摘している。整理すると、文学や映画が後押しした北海道の観光ブームは、まず原田康子の『挽歌』（『北海文学』一九五五年六月―一九五六年七月）がベストセラー小説として広く話題になったことが大きなきっかけとされる。また、武田泰淳『森と湖のまつり』（『世界』一九五五年八月―一九五八年五月）によってさらに小説の舞台としての北海道が注目を集めた。これらの小説が映画化されたことによって、北海道の観光ブームは決定的となる。映画『挽歌』（監督…五所平之助、主演…久我美子、森雅之、松竹）は一九五七年九月に公開され原作の小説とともに大ヒット作となった。映画『森と湖のまつり』（監督…内田吐夢、主演…高倉健、香川京子、東映）は一九五八年十一月に公開され、続々と北海道を舞台にしたものが話題を呼んだことにより、北海道は戦後最初の観光ブームを迎えた。

文学や映画に後押しされ一九五〇年代半ばから北海道は大きな観光ブームとなるが、三島の『夏子の冒険』はこのブームを先行するものだったと位置付けることもできるだろう。三島は連載を前にして北海道取材していることが木原の前掲書に言及されている。木原によると三島が北海道を訪れたのは一九五〇年で鳥類研究家の斎藤春雄が案内した。このあたりの事情については、三島の年譜では明らかになっておらず、北海道の関係者の間でのみ伝わっているものと思われる。¹⁵ただ、三島が作品を書く際には、綿密な取材をおこなうことが多いこと、『週刊朝日』の連載小説であるため取材費が賄える状況にあったと推測できること、作者の言葉としてこれまでは地方の調査に手がまわらなかったが「はじめて機会を得たので、私はこういう題材にとり

くむ意気込を改めて持った」と語っていることなどからすると、木原が述べているように三島が北海道取材したことは明らかだろう。

『夏子の冒険』で北海道が舞台になった背景には、北海道の観光地化に向けた動きも無縁ではなさそうだ。一九四九年五月には支笏湖が「支笏洞爺国立公園」に指定されたことによりその知名度を上げ、「戦後に観光ブームが起こるとたちまち人気の行楽地になった」¹⁶。また、一九五一年十月二十五日には北海道における民間航空が再開され、日本航空による東京（羽田）―札幌（千歳）間の航空便は「ドル箱路線」と呼ばれた。¹⁷

このような北海道の観光地化に向けた動きに、新聞社系週刊誌の『週刊朝日』が目をつけていたとしても不思議はない。編集部の方角性として、戦後に新たな観光地として見出されていく北海道を舞台に取り上げることが連載小説の目的であったとするならば、『夏子の冒険』でアイヌ部落を描きながらもアイヌをめぐる問題が見過ごされていることにも納得がいく。あまりにも典型的なまでのアイヌ表象や自然対都会の構図は、観光地としての北海道の発見という東京からの視線に捕捉された三島の限界でもあっただろう。

六 おわりに

いずれにせよ、『夏子の冒険』で新たな観光地としての北海道を舞台にすることは、この作品の前に連載されていた平家ゆかりの土地を巡る吉川英治『新・平家今昔紀行』とは大きく差別化をはかるものであり、まさに吉川に対峙する新人作家らしい作品でもあった。『夏子

の冒険』での北海道描写をめぐる読者の投稿が、編集部によって論争として取り上げられていることも、この作品を話題作に押し上げていくことにつながっている。なかでも、この作品の北海道描写について「天然色映画はこうもあろうか」と語る読者の感想を紹介したことは、その後「総天然色」の映画として公開されたことにつながっていくようにも感じられ、『夏子の冒険』が大衆小説としてヒット作になつていく流れを見通すこともできるだろう。

『週刊朝日』の看板小説である『新・平家物語』に並ぶ若手の作品として、『夏子の冒険』は論争が巻き起こるぐらいには読者の関心を集めた作品であった。それは若手作家による現代小説を求めていた編集部への期待にもこたえるものだっただろう。三島はこの連載によって、新人作家として大衆的な読者に向けたアピールを達成し、流行作家への仲間入りを果たすことができた。文壇という狭い場だけでなく、さらに活動の場を広げていく足掛かりにもなったはずである。

注

- (1) 木村康男『夏子の冒険』長谷川泉、武田勝彦編『三島由紀夫事典』明治書院、一九七六年一月、二九〇頁
- (2) 松本鶴雄「三島由紀夫全作品解題」三好行雄編『三島由紀夫必携』学燈社、一九八三年五月、九〇頁
- (3) 佐藤幹夫『村上春樹の隣には三島由紀夫がいつもいる』（PHP新書、二〇〇六年三月）では、『夏子の冒険』を手本にして『羊をめぐる冒険』を書いていると考察している（一九〜一六〇頁）。
- (4) 高澤秀次「北の文学誌（17）三島由紀夫から村上春樹へ―『夏子の冒険』と『羊をめぐる冒険』―『北の発言』十八号、二〇〇六年十二月、六四頁
- (5) 大澤真幸『不可能性の時代』岩波新書、二〇〇八年四月、七六頁
- (6) 角川文庫『夏子の冒険』（二〇〇九年一月）の解説を担当した千野帽子は次のように指摘している。「修道院とは尋常ならざる決意ですが、吉屋信子の少女小説『桜貝』のように、波瀾万丈の運命に翻弄されたヒロインたちが、世の無常を嘆じて修道院に入るという結末があるなど、娯楽小説ではさほど突飛な話でもなかったようです。要するに古典文学における「出家」と考えれば、『春の雪』にはじまる三島の『豊饒の海』四部作で伯爵令嬢・綾倉聡子がやったことも同じです。」（二七〇〜二七一頁）千野の指摘するものだけでなく、『英霊の声』や『奔馬』などで描かれる天皇という絶対的な存在への恋情とも重なるものではないだろうか。
- (7) 鈴木千祥「戦後メディアから読み解く『夏子の冒険』」『日本文学誌要』第九五号二〇一七年三月、九八頁
- (8) 高橋呉郎『週刊誌風雲録』ちくま文庫、二〇一七年五月、七九頁
- (9) 注（8）に同じ、七九頁
- (10) 扇谷正造『現代のマスコミ 週刊朝日編集長の覚書』春陽堂書店、一九五七年六月、二二頁
- (11) 朝日新聞大阪本社出版広告部『週刊朝日読者調査報告書』（一九六一年一月）によると、読者全体の「対象職業別」では、「主婦」が三十五％と一番多く、次いで「勤人」二十五・四％、「商工」十五・四％である。また、読者全体の「学歴別」では、一番多いのは「新高・旧中卒」で五

十五・一%、次いで「大学・高専卒」が二十二・六%、「新中・小学卒」が十七・三%、「学歴不明」が五・一%である。

- (12) この論争に対しての三島の言葉は残されておらず、どのように感じているかは現時点では分からない。また、読者の反応がその後の作品に影響を与えたかも明らかではない。もっとも、連載中にはすでに作品の執筆を終えていた可能性もある。ただ、この後物語は終盤に向かい、緊迫感が高まるとともに、母・祖母・叔母のコメディエンスぶりが強調されていく。

- (13) 杉山欣也「旅行記／ツーリズム」有元伸子、久保田裕子編『21世紀の三島由紀夫』翰林書房、二〇一五年十一月、二八六頁

- (14) 木原尚彦『北海道文学史 戦後篇』北海道新聞社、一九八二年四月、一五頁

- (15) 石郷岡武「三島由紀夫・北海道取材作品について」（『函館国文』二十六卷、二〇一〇年）では、前掲書の木原の記述をもとに、一九五〇年に三島が北海道を取材した時に北海道大学植物園博物館を訪れたのではないかと推測している。当博物館には、明治期に人間を襲った熊とその体内から摘出された人間の身体の一部が安置されていた。また、その実話に材をとった三遊亭円朝『椿説蝦夷訛』という話があることから、石郷岡は「三島が植物園博物館に安置されていた標本を観察し、衝撃を受け、糸を手繰って『椿説蝦夷訛』に行き着いたであろうことを、「唯の推測」として退けられるだろうか」（三四〜三五頁）と論じている。

- (16) 国土交通省北海道開発局札幌開発建設部によるインターネット上のサイト「石狩川治水100年 明治43年頃（明治43年〜昭和34年頃）千歳川流域 暮らし・社会」による。

- https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen_keikaku/e9fjd60000001ir4.html
(17) 札幌中央図書館『新札幌市史デジタルアーカイブ』『新札幌市史第五巻 通史五上』による。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJS06U/0110005100/0110005100100050/hr011720>

「夏子の冒険」本文テキストは『決定版三島由紀夫全集二』（新潮社、二〇〇一年一月）を使用した。

（なかもと さおり、山口大学人文学部講師）